

弱り目に祟り目

聖
王



想の目 確認にプラス

奇奇怪怪

今日はいつもより、少しだけ良くない1日だった。

朝、15分寝坊して、服がなかなか決まらなくて悩んでいたら、もう家を出なくてはいけない時間になっていて慌てていつもと同じような服を着て家を出る。

慌てた甲斐あって、いつも乗る時間の電車に無事乗車。

仕事もこれといって急ぎの案件もミスもなかったが、定時に帰るとねちねちと嫌味を言われるので定時30分過ぎに退社。（それでも早いって言われることもあるけれど）

帰り道にあるコロッケ屋さんへ寄って今日の夜ご飯を調達。

「(あ...)」

いつもならこの時間には残っていない王様コロッケが残っていて少しだけ気分が上がる。

「ありがとうございましたー」

「(ふふふ...)」

人間、好物を得た際には自然と笑顔になるらしい。

駅前から少し離れているとはいえ、そこそこ人通りのある往来にも関わらず私はにやにやしていた。（嘘でも笑顔とは言いづらいという事は自覚済みである。）

家について王様コロッケを温めようと思ったのだが、パックを手につくとまだ微かに温かい。これなら温めなくてもすむ。

すぐさまリビング（と呼べるほど部屋があるわけではないがとりあえずここではリビングと呼ぶ）に戻り、王様コロッケに食らいつく。

「ん～、やっぱ美味しいっ」

サクツとしてて、中はジューシーお肉がたくさん入っている。

さすがは王様コロッケ。

このコロッケを食べられただけで、今日の私の1日は最高にツイている1日となった。

「はぁ～お腹いっぱいになった後のお風呂ってどうしてこうめんどくさいのかねえ～」

でもお風呂に入らないと布団に入れないしなあ...はあ....

そんなことを言いながらソファの上でだらだらとバラエティを見ながら、腕も足も投げ打って、人がいたら絶対にできない格好で疲れた体を労っていた。

「ぷっ...あっはははは！」

私の周りには、家に帰ってすぐ麦散らかした服が散乱し、姿見の横の椅子には大量の着ることのなかった服とバックが積み上げられ、テーブルの上には毎日使うためいちいち仕舞うことのない化粧品の類がひしめき合っている。

「(こんな部屋人に見せられない...そりゃ彼氏になんかとても...ってかその前に見せるような彼氏もないんだけど)はあ...虚しいよお〜...」

酒がなくても、こんな一人暮らしにしちゃ広い部屋に一人でいたら感傷的になれることを最近知った。

部屋が広すぎるのも考えものだ。

「ん?いやいや、部屋の前にまずこの格好が見せられないっての!」

3秒前までは泣き出してしまいそうだったのに、3秒経った今は自虐ネタで笑っていた。(明らかに空笑いだったけど、それでも泣くよりかはマシ)

「さあーて、お風呂にでも入りましょうかね。どっこいしょー、って一人暮らしが長いと独り言が多くなっちゃうからあかんね〜」

...

って言うのすら全部言っちゃう辺り、本当にあかんと思う。

そうしてソファから立ち上がったとき、悪魔が来りて笛を吹く的な感じで(ちなみにどんな内容かはよく知らない、というかタイトルしか知らない。タイミング的な意味合いで、そう思っただけ)うちの玄関のチャイムが部屋いっぱい響き渡った。

基本的に私は事前に連絡がないと出ない。

どんなにバレバレでも居留守を使う。

なのにその時はどんな神様の悪戯が働いたのか、私は出てしまったのだ。

.....

多分その時の私は浸っていたのだ。

だってその日はいつもよりも早く帰ることができたし、好きな限定のコロケが買えたし、少しだけしか見てないけどバラエティは面白かったし、とりあえず良い事が多かったからその延長線上で最後の最後に何かしらあるんじゃないのかと思ってしまった。

「はいはい」

一ガチャ。

扉を開けると、目線の先には何も無い。拍子抜けだ。

少しだけ顔を玄関から出して玄関から出してキョロキョロと首を覗かせるが誰もいない。
はて、こんなボロアパート（失礼）にピンポンダッシュ仕掛けるやつなんているのだろうか…。
まあ、いつまでたっても扉を開けっ放しにしておくわけにはいかないので扉を緩やかに締めて
いて、あと少しで完全に閉まるだろうという時、やんわりと扉を閉める力と逆の力を感じた。

「(ん?)」

その違和感に目を向けると…

「にゃー」

一匹の猫が、どごその悪徳セールスマンのような手口（閉まりかけたドアに無理やり手足を挟んで、完全に扉が閉まらないとようにするテクニック）をしているじゃあないか。

「……………」

扉は物理のなんかの法則によって、また再びゆっくりと開いていった。

小さくギィーと、音がする。

外はもう暗いのに、どこからかカラスの鳴き声がした。

*

「ふう〜」

あのあと、私は無事悪徳セールスマン風の猫を見事なスルースキルでお帰り願う事に成功した。

だって悪徳セールスマンみたいな行動をする猫なんておかしすぎる。

百歩譲って扉を押し返す猫がいたとしても、ピンポンを律儀に押す猫なんているのだろうか…？

少しだけ時間が経って冷静になった頭は先ほどの猫がどれだけ違和感があったのかを教えてくれた。

そうすると今度は興味の方が強くなってきて、もう一度あの猫に会えないかと思案し始めた。

ーピンポーン。

そして本日2回目のチャイムが鳴り響く。

私はまたあの猫だとなんの疑いもなく、扉を開ける。

「え…」

「...」

すると、そこに立っていたのは見た事のない男の人が立っていた。

「夜分遅くにすみません...ちょっと、ほんと、あの...突然で申し訳ないし、信じてもらえないとは思うんですけど...」

「はあ...」

なんだ、この男。

営業にしちゃオドオドしてるし、知り合いでは決してない。

やばい、開けなきゃよかった。

猫にテンションが上がって正常な判断ができなかった私、ガッデム。

この人きつと関わっちゃいけないタイプの人だ。

きつと今から変な宗教とか、頭イっちゃってる系の話が始まるんだ...。

あ、それか酔っ払い！

うん、それならまだいい、てかそれがいい。

それだったら冷静にお帰り願えばいいだけだからね！

さっきの猫みたいに。

「あの...実は僕、幽霊なんです」

「.....は？」

どこかの家の屋根の上でキャットファイトが繰り広げられてるのか、遠くで猫たちの激しい鳴き声が響き渡っていた。

蝉が残りの命を振り絞って鳴いているのが耳障りな、湿度の高い、少しベタつく夜の事だった。